

生活科における表現活動の意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 叶, 雅之 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/658

生活科における表現活動の意義

Meaning of Expression Activities in Living Environment Studies

叶 雅 之^{*}
KANO Masayuki

1 研究の背景と目的

平成29年告示の学習指導要領を経て、教科「生活科」は、創立30年を迎える。新しい学習指導要領では、資質・能力の育成を目的に、各教科等の目標の様式を整えるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした教育活動の展開が求められている。

本研究では、生活科における表現活動の重要性に着目し、新教育課程で目指す「主体的・対話的で深い学び」に表現活動が果たす役割が大きなものがあると考え、生活科における表現活動の役割や意義について考察する。

2 児童から見た表現と教師から見た機能

表現は発信する表す側とその表されたことを受け止める側があって成り立つ。津幡道夫は「表現における理科と他教科の関連」1995.2において、教育実践における表現を教師と児童に分けて次のように整理している。それを参考にして教育における表現の機能を考えてみる。

(1) 児童から見た表現の機能

① 曖昧な思いや考えを明確化する働き

児童は、表現をすることによって、表現をしている主体である児童自身が、どのような心的状況であるかを明確にすることができる。すなわち、言葉に出し、書き表すことによって、今まで無意識に感じてはいても自覚をしていなかった事柄を改めて「自分はこう思っていたんだ」と明確に自覚をすることができる。

② 他者に伝達をする働き

表現をすることによって、初めて表現の主体である児童の意思が他者である教師や友達に伝えられる。この場合、特に小学校低学年の場合は、その意思が自ら意図したとおりに伝わらないことや、表現の方法や内容の整合性が図られないこともある。その理由として語彙力

^{*} 武蔵野大学教育学部

の不足や対人関係力の不足などが考えられる。

③ 記録に残り、記憶を鮮明にする働き

書いたり、作ったりすることは、それ自体が作品として残り記録的であるが、身体表現など記録に残りにくいものも記憶につながり、その表現を手掛かりに、後の時点で振り返ったり、記憶を鮮明にしたりすることができる。すなわち、なんらかの形で表現をすることは、「このような時にこんなことをした」などと経験が定かになり、さらなる次のことを思い出し、発想をしていく手掛かりとなる。

④ 活動を活性化する働き

表現の場や方法を定めることは、児童に活動の目的や到達点を明示することにもなり、活動の活性化を図ることができる。このため、表現活動の主題や時期、どのような内容や方法で行うかの設定や、それに伴う約束事などの工夫は、極めて重要である。例えば、絵や工作などで植物や動物を表すときに、対象をより詳しく観察してみようという活動を引き出すことができるなどがある。

⑤ 自己感覚を明確化する働き

表現をしている自分や自分の作品を知覚することによって、有能感や効力感、充実感を味わい、自信を深めるなど自己感覚を明確にすることができる。また、友達同士で認め合うことによって、さらにこの働きを高めていくことができる。

(2) 教師からみた表現の機能

① 活動のめあてなどを具体的に示す働き

表現の方法・様式等を定めることにより、児童に活動の到達点を明確に示すことができる。そのためには、児童の発達や実態に合った適切な表現の仕方を定めることが重要である。

② 児童の見方や考え方、イメージを明確に把握し評価する働き

児童の見方・考え方やイメージ等を具体的な形あるものとして把握することができる。表現の方法を工夫することにより、児童自身が自覚していないような感覚も捉え、評価することができる。

③ 必要な支援の内容を具体的、個別的に明示する働き

個々の児童に見合った表現を誘発し導くことによって、個への支援、援助を具体的に行うことができる。そのためには、児童がどのような願いや思いで表現しているのかを的確に捉え、児童の内面に目指した適切な評価をする必要がある。

④ 児童一人一人の能力、態度などの伸長を評価する働き

表現された内容によって、以前の表現と比較するなどでき、児童の能力、態度などの伸長

を評価し確認ができる。

⑤ 教師の行動を評価する働き

表現された内容を見ることによって、教育成果の評価ができ、教師の支援や指導を省みることができる。

表現活動は、教育実践には欠かせない重要な機能がある。特に学習における児童の主体性の発揮や友達との意見交換に果たす役割は重要である。表現活動は、表現された結果の良し悪しに目が向きやすいが、表現がもつ多くの機能に着目し、学習過程を含めて、表現活動の有効な活用を図っていくことが必要である。

3 学習指導要領から見る生活科における表現活動

生活科においては、平成20年度学習指導要領では、各学年の目標の（4）に「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができる」と示されている。児童が熱中し没頭したこと、発見や成功した時の喜びなどは表現への意欲となり、それを基盤とした表現する活動は低学年の時期に欠かせない大切な活動であるからである。それと同時に、その活動について他者と交流して認め合ったり、振り返り捉え直したりすることも必要であり、様々な児童の気づきを言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法を使って表現することが、生み出した気づきを自ら自覚することにつながるからである。表現する活動は気付いたことを基に考え、新たな気づきを生み出し、気づきの質を高めていくことにつながる。これらの観点から、対象に直接働きかける活動と表現する活動とを関連させて取り扱うことが肝要であり、特に低学年児童の発達段階では、思考と表現の一体化が現れることを教師が理解しておく必要がある。

平成29年公示の学習指導要領では、教科目標の（2）に思考力・判断力・表現力の基礎の育成として「表現することができるようにする」という項目が入ったが、各学年の目標の表現についての記述は、内容の取扱い2（2）に移行し、「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法により表現し、考えることができるようにすること。また、このように表現し、考えることを通して、気づきを確かなものとしたり、気付いたことを関連づけたりすることができるように工夫すること。」（下線部は筆者が記入）と示している。表現が思考を促し、気づきの質を高める深い学びにつなげる役割が示されているともいえる。教師には、表現を通して児童の気づきを次の学習につなげ、広げていくことが求められている。

4 小学校低学年期の児童の身の回りの事象等の捉え方と表現

児童の身の回りの事象に対する見方・考え方は一人一人異なっている。また、小学校低学年の児童は、身の回りの様々な事象に関わるときに絶えず先行経験に影響され、身の回りの世界につ

いて固有の解釈をしており、誰か他の人の知識を受動的に受け入れているのではないということが明らかになってきている。学校教育では、とかく子供は教育を受ける対象者であり、正しい知識や概念を形成される客体としてみるものがあつたが、児童自らが知識や概念を形成する主体であることを認めていくことが大切である。そこで大切なのは、児童の思いや考えを把握できる表現活動である。

生活科における表現活動では、動物や植物をスケッチして描いたり、文章で観察記録をとったり、町探検で見つけたことを簡単な絵や写真を使って紹介したり発表したりする活動がよく行われる。低学年児童は具体的な活動や体験を通して様々なことに気付き、考えるが、表現活動においても同様のことがいえる。体験と思考と表現を一体として捉え、表現活動を通して改めて対象について考えることが期待されるが、低学年児童が感じたことや考えたことを明確に言葉で表すことは語彙力が乏しいこともあり難しい。例えば、低学年児童においては、「うれしかった」「楽しかった」「大きくなった」など自己中心的な表現はできるが、他者にとって分かりやすい表現とする他者意識は乏しいのが現実である。そこにおいて重要な役割を果たしているのが教師であり、教師が児童の気付き等の表現を拾い上げ、その質を高めていくことが重要である。例えば、「大きくなった」のは、何に着目し何と比較しての発言なのか、他に同様の変化があるのか、他の人は似たことに気付いているかなど、一つの気付きから多様な気付きへと広げていくことが大切である。

5 生活科における表現活動の教育的な意義と教師の役割

小学校低学年の児童においては、語彙力も乏しく、明確な言語で思いや考えを伝えることが難しい児童もいる。そこで、児童が何に気付き、何を考えているのかを周囲に伝える教師の役割が重要となる。表現とは、「感情や考えを言語や表情・身ぶりなどに表わすこと（三省堂国語辞典）」であり、「内にあるもの」「見えないもの」を外に見えるように表すことである。この表現は「表出」という言い方と比べると、表現は「伝達も含む」と言う点で区別をつけることもある。心理学者の乾孝によると、「あかちゃんが泣くのは表出だが、役者が泣くのは表現である」という。学校教育においては、表現という活動は、常に送り手と受けての双方の視点からとらえていくことが大切である。送り手と受け手をつなぐ重要な役割を担うのが教師である。

(1) 児童の価値あるつぶやきや気付きを拾い上げて生かす

学校の学習においては、指導の過程でワークシートや課題プリントを使用することが多くある。これは課題を明確にして、児童の学習意欲を高めたり、指導の焦点化を図ったり、個別化を図ったりする上で有効な方法である。しかし、教師がワークシートの作り方に留意をしないと、効率的で合理的な教え方とはなっていない、用意された一つの答えに導くための作業となってしまう、学級が画一的な考え方に陥ってしまう危険性がある。

学習のワークシートや学習カードを通して、児童に表現をさせる際には、児童一人一人のその児童なりの自由な発想や疑問、考えを生かし、自らの見方・考え方を築くような工夫をする必要がある。生活科における児童の気付きや発見は、つぶやきや友達との何気ない会話の中から教師

が価値ある言葉を拾い出すことが多くある。雲を眺めて、「白くてふわふわしている」という児童のつぶやきを受けて、教師が「何みたいに」と投げかけると「綿菓子みたい」等と児童は考え、言葉で表現する。このような会話の中で、昨日との比較や雲の比較など、児童の気付きの質は高まっていく。明確な言語で示されていない児童のつぶやきも、児童の大切な内発的な気付きの表現として生かしていくことが教師の役割として重要である。

（2）表現による活動の振り返りを通して、集団の中で多様な見方・考えにつなげる

児童が活動や体験をしたことを言葉や作品等で振り返ることで、自分が何に気づき、何を不思議に思っているのかを明確にして、それらを追究していくことが生活科の学習では大切である。答えが一つではない問題や事象に対して、児童が自由に自分のイメージを膨らませ、表現することで、気づきを共有し関連づけて、多様な見方や考え方があることに気付いていく。

特に、集団の中では様々な見方や考え方が存在することを知り、その異なる見方や考え方を比較し、より正しいと思う考えを選択する過程は学習活動において重要である。ここで大切なのは、児童自身が疑問に思ったり、不思議に感じたりすることを明確に心にもち、それを表していくことであり、気づきや思いに違いがあることが当たり前であることを児童に伝え指導をしていく教師の態度や姿勢である。意見や考えの違いを生かして、児童に自らの判断する力や考える力を身に付けられるようにしていくことが重要である。

（3）表現活動により児童の主体性や多様性を引き出す

表現活動を伴わない学習活動は、児童にとって受け身の学習となりやすい。具体的な活動や体験を通して考えたこと、気付いたこと、思ったことを多様に表現できるようにすることによって、児童は主体性を発揮していくことができるのである。表現活動の活性化は、児童にとって主体的な学習活動を保証することでもあり、様々な違いを認めることにもつながる。このほか思考力や判断力の育成にもつながっていく。

例えば、児童が絵を描くときに、木々の葉は緑色、海や川は水色、雲は白色、太陽は赤色などとパターン化して塗ることが多くあるが、現実広がる自然の色は多種多様な様態を示している。同じ緑でも若葉色や深緑色、浅葱色など様々な色があることの良さを認め、様々な表現を認めるのは教師の役割でもある。児童自らが感じ考えたことを自らの意思で表すことは極めて自然なことであり、多様な表現を認めることが多様性や異なることを認めることを学ぶ貴重な学習となるのである。

ここで気を付けなくてはならないのは、自己中心性が強い低学年児童においては、児童一人一人の欲求や考えを自分勝手に表すのを認めるということではないということである。学級という集団で学習活動を行う学校では、周りの人々に理解されることがあってこそ得られる表現の意味や価値がある。その理解を得るためには周りの人々によく分かる表現が求められるとともに、周りの人々からの影響や関わり合いを考え、自分の表現や自分の在り方を考えていかななくてはならないのである。

(4) 表現による発信と受信で伝え合いが人間関係の広がりをつくる

表現活動には発信者としての活動とともに、その表現を受け止め、相手を正しく理解していくという受信者としての活動がある。しかし、小学校低学年の児童にとっては、自分の考えを言葉にまとめ、それを相手に伝え、理解してもらうことは容易なことではない。時には言葉だけでは表現しきれずに、絵や図、実物を持ってくるなど自分なりの表現方法を工夫する児童もいる。また、ザリガニの様子を、表情や身振り手振りで表現する児童もいる。平成29年度公示の学習指導要領では、内容の取扱いで、「言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法により表現し考えることができるようにすること」とあるが、これらは相手があってこそその動作化、劇化等であり、受信者である教師や友達、学級があってこそ成り立つ活動でもある。

児童は、ダンゴムシやチョウを捕まえると、しっかりと手に握ってその感動を伝えたい人を探す。担任の先生や親に駆け寄り、捕まえた虫を見せて、喜びや驚きに共感を求める。時には、捕まえた場所へ連れて行き、いかに見つけたのかをたどたどしく一生懸命に話すこともある。このように、自分の気持ちを受け止めてくれる人がいるからこそ、表現をする意欲や工夫が生まれるともいえる。学校においては、教師や友達がそのような気持ちを受け止める存在であり、教師は、互いに発信と受信をし合う伝え合いが広がる学級づくりを心掛けたい。

6 まとめ

表現活動は、児童の教育活動には欠かせない教育方法である。表現は意識的・意図的な表現と無意識的・無意図的な表現があるが、いずれも主体者である児童の心の状態を表している。教師や保護者、他の児童は、表現されたものを通して、主体となる児童の心の状態を推定することができる。児童が身近な自然や社会、自分自身を認識する生活科においては、主体的・対話的で深い学びを通して目標を達成するためにも表現に着目し、活用することが重要である。生活科の学習活動の充実を図るには、児童の主体性を発揮させて、教師が多様な表現方法に着目し、活用を図るとともに、違いを認め多様性を生かす教育が大切である。

参考文献

- ・子どもの見方や考え方を膨らませる表現活動のポイント5 叶 雅之・津幡道夫編著 東洋館出版 199510月15日
- ・小学校生活 寺本 潔編著 玉川大学出版部 2016年2月25日
- ・小学校学習指導要領 平成29年3月 文部科学省（文部科学省ホームページより）
- ・小学校学習指導要領解説 生活編（平成20年8月） 文部科学省